真・恋姫†無双　【北郷一葉のメイド戦記】

テンテン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双　【北郷一葉のメイド戦記】

【Ｎコード】
Ｎ４１７４Ｊ

【作者名】
テンテン

【あらすじ】
天皇様の所でメイドの仕事をしていた聖フランチェスカ学園の２年生、北郷一葉は夜の見回りで怪しい侵入者を見つける。殲滅しようと放った蹴りは見事盗人の持っていた鏡に命中。白い光につつまれ、目が覚めた世界はなんと美少女だらけの三国志。一葉は太陽を持つ覇王とともに天下を目指す。

第1話　テレポート（前書き）

はじめまして、テンテンといいます。
小説をかくのは初めてなので、いろいろと読みにくかったりすると思いますが、暖かい目で見てください。

〈注意〉
1．主人公は北郷一刃ではありません。ったいうか男ですらありません。
2．キャラ崩壊しているところがあるかもしれません。頑張って気にしないでください。
3．感想や修正点等を教えてくれると作者は喜びます。

それでは

『真・恋姫†無双　【北郷一葉のメイド戦記】　～第1話　テレポート～』

お楽しみください！

第1話　テレポート

「ここは…どこ？」

目が覚めたら私は荒野の真っ只中にいた。

「よし、まずは落ち着いて深呼吸してみよう」

すっすっは～…すっすっは～……

思わずマラソンとかにやる呼吸をしてしまった。どうやらかなり混乱していたらしい。

とりあえず状況を整理してみようかな

1．私の名前は北郷一葉、聖フランチェスカに通う2年生

2．夏休みを利用して天皇様の所でメイドの仕事をしていた

3．夜の見回りをしていたら宝物殿で盗人を発見、取り押さえようとしたら相手が反撃してきたので、任務を捕獲から殲滅に変更して回し蹴りを放ったらちょうど相手の持っていた鏡に当たって鏡が砕けたら、いきなり白い光があたりを包んで……

ここから記憶がない。ということは、ドウイウコト？

とにかく、自分の身体を調べる。こんな所に来た記憶はないから、おそらくあの盗人が運んだんだろう。っていうかなにげに純潔の危機？

だけど、身体に異常は無し。衣服の乱れもないし、もちろん私の操も大丈夫。愛用している『月読』もちゃんと私の背中にある。

となると余計に相手の意図がわからない。私を無傷でここに運んだのは何故……？

「おぃ女、命が惜しけりゃ身ぐるみ全部置いてきな」
なんかすごくチンピラっぽいセリフが聞こえてきた。
とりあえず振り向いてみてまず思ったこと
（この人たち、レイヤーなの？）
ノッポとチビとデブの３人の男がいた。
とりあえず観察、ノッポはやけに偉そうな態度で私を見下ろしている、デブは脂肪のせいか汗をかいていて気持ち悪い、チビは古そうな本を持っている。
何より気になるのは腰に下げてる剣。普通の一般人は剣なんか持っていない。本物なのだろうか？
「なにじろじろ見やがる。とっとと身ぐるみおいてきやがれ」
急かしてくるので、とりあえす質問してみる。
「あのー」
「あぁ？」
「あなた達はコスプレしてるんですか？」
お願いだからＹＥＳと言って、私を普通の日常にもど――
「なにわけのわからない事言ってやがる。ふざけてんのかコラ！」
してはくれないのね。ご丁寧に剣まで向けて。
それにこの感じ、やっぱり…

「…本物？」

「あぁ本物だぜ。てめぇの首なんか軽く切り落とせる真剣だ」

どうしよう。この人たちを倒すのは問題ないけど、もし偉い人だったら……

「なにしてやがる！　さっさと金目のもん置いグパァ！？」

あ、なんか吹っ飛ばされた。

「おなご1人に大の男が3人とは、貴様らにはひとかけらの誇りも無いのだな！　だが貴様らの悪行、この私がいる限り決して許されぬ事と思い知れ！　天に変わって私が成敗してくれる！」

おぉ、正義の味方みたいにかっこよく登場してきたよ。しかも後半のセリフなんか某美少女戦士を思い出しちゃったし。

「あ、兄貴！　ちくしょう、デブ、ひとまず撤退だ、逃げるぞ！」

逃げるときまでチンピラ魂貫いたことにむしろ感心した。っていうかデブな人の名前はデブって言うんだ……かわいそうに。

「お主、怪我はないか？」

「あ、はい。大丈夫です」

正義さん（名前がわからないので）が声をかけてくれた。

「しかし、危ないところだったな。間に合ってよかった」
「はい、本当に助かりました。私は北郷一葉って言います」
「うむ、私は――」
「星、大丈夫でしたか？」
声がした方を向くと2人の少女が駆け寄ってきた。
一人は正確な立方体。もう1人はのんびりとした猫のような感じがする。
「無論だ。私があのような者たちに遅れをとるはずがなかろう」
「わかっています。私が聞いているのは彼女の方です」
「あぁ、なんとか間に合った。かなり危なかったがな。しかし行くさきざきでああいう者たちに会う度に、今の世がどれだけ乱れているか認識させられるな」
「全くです」
2人とも何やら話し始めてしまった。完全に蚊帳の外なんだけどどうしよう……
……と
「ほらほら2人とも、お姉さんが困っていますよ」
猫さんが助け舟を出してくれた。ありがとう猫さん！

「いえいえ、どうたしまして」

「！？」

……読心術でも使えるのだろうか？
まぁとりあえず、

「えぇと、私は北郷一葉っていいます」

「おっと、すまない。私は姓を趙、名を雲、字は子龍という」

……ん？

「私は戯才子といいます」

……んん？？

「風は程立といいます」

……んんん？？？

趙雲、戯才子、程立――どれも大昔の中国、三国志に出てくる人たちの名だ。っていうか結構なビッグネームだ。
だけどそれは１０００年以上も前のこと、……もしかして

「すみません、もしかして今は漢王朝ですか？」

「？　もしかしなくてもそうですが」

もしかしなくても今は漢王朝、この人たちが嘘をついているとは思

えない、つまり私は――

「――タイムスリップ？」

「？　たいむ……何ですか、それは？」

原因はたぶんあの光、だけど光に包まれて三国志の世界へタイムスリップなんて、どこのＳＦなんだろ……
それに３人とも女の子だし、ホントどうなってるんだろ？

「それにその服、侍女の服に似てますがおそらくかなり上質な布でできていますね。そこらの物とは比べ物にならないくらい。一体あなたは何も「そこまでだ稟」どうしたんですか？」

「官軍だ」

趙雲さんの指の先には土煙、旗がたっているから盗賊とかじゃないんだろう。

「ふむ、それではまたな一葉殿」

「どうかしたんですか？」

「なに、たいしたことではない」

「風たちのみたいな流れ者ががお姉さんのような人と一緒にいると、たいていの人は良からぬ事を想像してしまうのですよ」

「そういうことです。官軍に保護されればもう大丈夫ですので安心してください。では」

「さようなら～」

いってしまった。ちゃんとお礼を言えなかったのが残念だけど、きっとまたいつか会えるだろう。
それよりもこれからのことを考えようかな。
そう思い、私は迫りくる官軍へと目を向けた。

ーーーーー趙雲サイドーーーーー

「どうかしましたか、星ちゃん」

「いや、少し考え事をな」

「一葉殿のことですか」

「あぁ」

先ほど助けた少女、上質な衣服に身をつつみ、背に布で包まれた何かを持っていた一葉という少女。
ここまではいい。見たことがない服だったが、世の中は広いのだから知らない布や服があってもおかしくはないだろう。
――だが

「私が手を出さなくても、問題なかったのではないかと思ってな」

「？　どういうことですか」

「星ちゃんが助けなくても、あのお姉さんなら1人で盗賊さんたちを倒せたということですか？」

「風、さすがにそれはないと　「その通りだ」　星！？」

「初めは気づかなかったが、今思い返してみると彼女は全く怯えていなかった」

「全く……ですか」

「あぁ、例えどんな者でもあんな何もなく、助けもないなら普通は怯える」

「相手に悟られないよう隠していたのでは？」

「汗もかいてなかった、体の震えもなかった、呼吸も正常だった。それになにより――」

―そうなにより―

「――あの目は強者の目をしていた」

「目、ですか」

「決して曲がらず、決して揺るがない、そんな眼だった」

「まぁ星ちゃんが言うなら間違いないでしょうね。ときに星ちゃん、お姉さんと星ちゃんだったらどっちが強いですか？」

「……わからない」

「わからない？」

「あぁ、たいていの者ならだいたいわかるのだが、一葉殿はわからなかった」

「実力を隠していたといいことですか？」

「そうかもしれないな」

風と稟に言ったことは間違っていないが、すべて正しいというわけではない。

正確には『底が見えなかった』というのが正しい。

私でも見切れないほどの底の深さ。武人として、一葉殿と闘いたいと血が騒いでいるのがわかる。

だがそれは無意味なこと。官軍に保護された彼女と出会うことはもうないだろう。

だからこそ、もし再び逢うことがあれば

（お互いに死力を尽くして闘いましょう）

ーーーーー一葉サイドーーーーー

趙雲さんたちとわかれた後、私はやってきた官軍に囲まれていた。

（これだけ見ると、私がなんか悪いことをしたみたいに見えちゃうよね）

脳内で脱出ルートのシュミレーションをしていると、官軍の中から3人の女の子が出てきた。

1人は赤く、けっして折れない剣

1人は蒼く、大空を飛ぶ燕

最後の1人は光輝き、この世を照らす太陽

私はその輝きに目を奪われた。
今まで様々な人を見てきたが、この輝きは初めて見る。
とにかく私は呆然としていた。

「貴様、何者だ！　名を名乗れ！」

剣の人が話しかけてきた。

「あ、すみません。私は　「あなた」　はい？」

そして太陽を持つ覇王は言う。

「この私に使えなさい」

これが、私と曹操、メイドと覇王の出会いだった。

第1話　テレポート（後書き）

めげずに読んでいただきありがとうございます。

感想や修正点のことよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4174j/

真・恋姫†無双　【北郷一葉のメイド戦記】

2010年10月10日20時42分発行